

---

# 君のままで

kokotarian

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

君のまま

### 【Nコード】

N4725Q

### 【作者名】

kokotarian

### 【あらすじ】

自分のままを好きでいてくれる王子様がお姫様を迎えに来る。  
手を差し伸べてお姫様を迎えてくれる。

今彼女は、王子様を待っていた。  
手を差し伸べてくれて、自分のままを好きになってくれる王子様を。

kokotarianは恋愛をかきました。

現代風の恋愛を是非ご覧あれ。

## プロローグ（前書き）

kokotarrian初投稿です。

恋愛を書きました。是非ご覧ください

若い人になんかお勧めですね。

今、ここまで読んでくれている皆様感謝です。

あつ。その前に・・・。

読む前にはハンカチをご用意くださいね笑

初投稿、頑張つて書いていきますので

kokotarrianをよろしく願います^^

では、ご覧あれ。

## プロローグ

一人のお姫様は自分を変えて  
今の王子様を捨てて、別の王子様を自分の物にして  
また捨てる。

すると、もとのお姫様は腐ってなくなる。

でも、いつかそんな日を素敵な王子様が止めてくれるかもしれない。  
自分を変えて、無理に他の人を  
自分のものにしなくてもいい。

自分のままを好きになってくれる人が迎えに来てくれるまで  
手を差し伸べてくれるまで待つていれば  
それは自分の腐ってない姿を王子様は受け止めてくれるから。

「君のままが一番素敵だよ。」  
ほら・・・ね。

お姫様の目からは一粒宝石が流れた・・・

眩しい光が目の中に飛び込んでくる。

お母さんの声と目覚まし時計の音が混ざってうるさかった。

「ゆかり！今日何曜日だと思ってんの。今日は大事な部活の日じゃないの？さっさとリビングに降りてきなさいね。お姉ちゃんとはとつくに起きてるんだからね！」

私はお母さんに取られた布団を頭までかぶせて時計に目をやった。

そして、五分くらい経ってからむっくり起き上がりリビングに降りた。

「ゆかり。ほら、早く準備しないと。部活は七時半じゃないの？」

「……七時半？今何時？」

「七時十分。」

お姉ちゃんはメールを打ちながら答えた。

「……やばい。遅刻する！」

「さっさと起きないからでしょ。早く行きなさい。」

私は制服に着替えて、なにも入っていないスクバを背負ってから靴を履いていた。

「ゆーかり。これっ、昨日やってたでしょ？忘れるよ。」

お姉ちゃんは昨日徹夜してやった英語のプリントの束を私に突き出した。

「ありがと。忘れるとこだった。いつてきまふ。」

「いつてらっしやい。」

私は急いでエレベーターに入って、中についでいる鏡を見て身だしなみを整えた。

お姉ちゃんは高校3年生の麻美という名前。

学校で一番か二番に綺麗な美人。

肌は透き通っていて、長い金髪の髪にふっくらした頬はピンクに染まっ

目は透き通った真っ黒な色。足は美脚で長くて身長は180センチもあ

すつきりした小顔。彼氏は大学になるまで作らないって言うてからこれまで何人フツてきたのだから……。

「……今日も頑張るじえ。」

なんて噛みながら言っ

て私は鏡で自分の顔をじっと見ていた。

私は高校1年生のゆかり。  
お姉ちゃんと一緒に茶金に染めた。長いさらさらな髪と真っ白な肌に林檎色の頬は誰にも負けない。

エレベーターが開いた瞬間、私は猛スピードで駆け走って自分の学

校の生徒をぐいぐい追い抜かす。

「朝ごはん食べて来るの忘れた〜。」

とか叫びながら。

学校に着いたのは七時四十分。

「・・・間に合わなかった。先輩に怒られるし。」

するとまわりは一気にざわざわした環境から静まり返った。

「・・・?」

何があつたと思いきや、私を呼ぶ声が背後からした。

「ゆ〜かり〜。おはよ〜」

「・・・誰?」

そこにいたのは、金髪でかなり盛れてる髪型にスカート丈が半端なく短く

一番は顔黒と呼ばれるギャルの肌。全然対面したことのないギャルだった。

「誰とか。まじうけるっ。」

なんだろうっと思いつながら、その場から立ち去ろうとしたとき。

「うちだよ〜。何で気づかないのオ?由美なのにイ。」

「・・・由美?!」

由美。それは、私の親友だった。昨日まで黒髪ストレートでスカートは普通の長さだった由美が今ギャルになって私の前にいる。しかも、たった一日なのに。

「もオ〜。ゆかりったらあ。」

「うつ……。由美お酒臭い……。」

「お酒？ちよつと飲んだだけだよオ。」

確かに由美の口からはお酒の臭いがした。

「早く教室行かないと遅刻するよオ〜。」

由美は酔っているせいかバランスを崩し私にもたれかかってきた。みんなの視線が痛かった。

「由美、帰ろ。」

「え〜。せつかく間に合ったのにイ。裕くんを送ってもらったのになあ。」

「裕くん？」

久しぶりに由美から聞いた男子の名前だった。

由美に肩を貸し、よろよろしながら私は由美を家まで送ろうとした。こんな状態が先生に見つかったらきつと退学にまで及ぶかもしれない。

「昨日オールだったからな〜」

「オールね。うちは徹夜で宿題だったし。」

「宿題とかア。」

由美は酔っていて訳も分からないことを一人でべらべらしゃべっていた。  
そして、あつという間に由美の家の前だった。  
ついだったので、お邪魔もさせてもらった。

「ふあゝ。眠い。」

由美の部屋は女の子っぽい人形がいっぱいな部屋だった。  
ベッドに横になりながら由美は真剣な顔になっていった。

「ゆかり。うち馬鹿なことしてた・・・。」

「ん？」

「ねえ、聞いてくれる？」

由美・・・そう。

由美は悔しかったのかも。

半年前に由美はとつてもお似合いな優しい佐久間さんという彼氏と付き合っていた。

一つ年上で由美はずっとその人を信じていた。

長い付き合いで、愛を分かち合っていた二人は本当に結婚するくらいの勢いだった。

けど、2年くらい経つと佐久間さんから連絡がうすくなってきた。  
由美はずっと連絡を待っていた。

ある日、由美は彼氏に徐々にデートへ誘われて待ち合わせの場所へ行った。

けど、待っても相手はこなかった。

「どうしてだろ・・・。」

由美が帰ろうとしたときメールが届いた。

佐久間さんからだった。

近くのファミレスに来て、と書いてあった。  
急いでいくと、そこには佐久間さんだけじゃなかった。

もう一人の女性だった。  
イチャイチャしてる。

由美は悔しかった。  
怒りが抑えきれなくて、自分をコントロールできなくて  
左手にはいつの間にかファミレスの机に置いてあったナイフがにぎ  
られていた。

ゆっくり、ゆっくり佐久間さんともう一人の女性に近づいて  
刺そうとした。

けど由美は泣き崩れて、その場に倒れこんだ。  
店員は由美に駆け寄り大丈夫ですかと訪ねて、お客さんも心配して  
くれた。

しかし、由美の目には深く刻まれた。  
佐久間さんは由美って気づいてるはずなのに、こっちに指を指して  
ゲラゲラ女性と肩を組みながら  
由美の泣き崩れた顔を笑っていた。

「・・・悔しい。ゆかり、抑えれなかった・・・ナンパに書いてい  
って、この気持ちを抑えたかったの。」

「・・・。」  
「悔しかった。見返してやりたくて・・・ひどいよ。ひどい・・・。」

「由美……。」

その目には一粒の涙がこぼれ落ちていた。

「ゆかり、ごめんね。」

由美は赤い腫れた目で私をじっと見ながら小さいかすれた声で言った。

「いいよ。てか、気にしないで。」

私は由美の背中をさすりながら言った。

「もう夕方じゃん。ゆかりの家こっから遠くない？」

「うーん、遠いと言えそうですが。別にいいよ。」

「暗くならないうちに帰りなよ。うち、明日の準備とかしないといけないし。ほら、髪色とかさ。」

「あ……、そっか。じゃあうち帰るわ。」

スクバを背負って私は由美の部屋を出た。

「玄関まで行くよ？」

「いいよっ。お酒で酔ってるのに、いきなり立ったらあぶないっしよ。」

「え……あ、うん。じゃあ、またね。」

「また明日。」

私は由美の前ではずっと笑顔でいた。

階段を下りて、由美のお母さんに挨拶をした。

「由美のお母さん、由美はいい子です。あんな風になっても由美の

中は変わってませんから。」

「……ありがとう。あの子の面倒よろしくね。」

「はい……。」

私は真剣な顔だった。由美の前とはちがって真剣な目つきをしてた。

「お邪魔しました。」

「またいらっしやいね。」

「ありがとうございます。」

由美のお母さんはいつも暖かいオーラが際立っている。

私が見えなくなるまで、ずっと後ろから見守っていてくれた。

「寒っ。」

と、言った口から白い煙がもわもわ出てくる。

さっきまでオレンジだった空は、もう深い青に染まり綺麗な宝石の粒が舞っていた。

「……はあ。」

「……かり！」

「……ん？」

「ゆ……かり！」

後ろを振り向くと、誰かが走ってきた。

身長が高く、後ろにテニスラケットを背負った男子だった。

「……ゆかり！」

「……誰？」

「俺！俺だよ。えっと……ゆたか豊」

「豊?!」

それは、同クラスの香川豊だった。身長はクラスで2、3番目に高く、女子にもモテて髪色はオレンジのような茶色で耳にはピアスが山ほどついていた。

「何そんなビックリしてんだよつ。」

バシツと背中をたたかれた。

「うっ……。」

「おっと、ごめん。強すぎた……なつ。」

「うっさいなあ……。今腰きた。痛てえ。」

「ばばあかよ。てか男子みたいだな、お前。」

「うるさいつてば。ちよつとは黙ってる。」

私は豊を睨んだ。

「こええ。てか、今日なんかあったよな。何だっけ?ギャル女に絡まれたみたいなさあ。」

「あれ、由美だから。」

「えっ!?あれ由美さんなの?」

豊は由美のことを何故だかさんづけけにして呼んでいる。由美は嫌らしいけど、豊はさんづけけをやめなかった。

「まじか。ちよつとビックリ。」

「でも明日は普通になるから。」

「へ。由美さんもやるなあ。」

「・・・うち、こつちだから。」

私はいつも帰る道を指さした。

「じゃあ、送るな。」

「え？いいよ。めんどくさいじゃん。」

「別に。帰っても兄貴とじゃれてるだけだし。」

「じゃれてるって・・・。何なの。笑」

「じゃ・・・じゃれてるつつうのはな。戦闘してんだよっ！」

「まじで？実は・・・。」

「おいっ！それ以上言ったら殺すぞ。」

豊の大きい手が私の口を押さえる。

こんなに手大きいんだ。

そんなことを思いながら、私の家の前まで来ていた。

「ごめん。何か、送ってもらっちゃって。」

「いいよ。男ってこんな感じだろ。笑」

「豊の言ってることめっちゃわかんない。」

「・・・あつそ。じゃあまたな。」

言いかけながら、豊は元来た道を後ろを振り向かず帰っていった。

「説教かな。」

そう言いながら私は家へと入っていった。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4725q/>

---

君のままで

2011年2月19日15時16分発行